

論文審査の結果の要旨

氏名：河 慧柱

博士の専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題名：ファンタジー映画におけるジェンダー・人種・階級表象

- 『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』を中心に -

審査委員：(主査) 教授 鳥山正晴

(副査) 教授 齊藤裕人 講師 村山匡一郎

教授 青木敬士

河慧柱の博士論文は、同時期に公開が始まった映画『ハリー・ポッター』シリーズ(8作品、2001-2011)と映画『ロード・オブ・ザ・リング 三部作』(原作『指輪物語』、2001-2003)のジェンダー、人種、階級表象について原作と映画を通じ詳細に分析した論文である。

序論では、映画は社会的な産物であり、個人の思想や価値観の形成に影響を与えることができ、特に現代ファンタジー映画は子どもたちに夢や希望を与えるだけでなく、全世代を対象にした作品になっている。そのため映画の内容によっては、観客に偏った価値観やステレオタイプを容認する考えを植え付ける危険性に言及し、ファンタジー映画のあるべき姿の方向を見つけ出すことが、この論文の目的であることが明確に示されている。

第一章は、多くの先行研究を詳細に調査し、ファンタジーの定義、ファンタジー文学と映画の関係について調査・分析し、ジェンダー・人種・階級表象について関わる先行研究についてまとめている。ファンタジーの定義についての考察は、さまざまな研究者のファンタジーの概説、ファンタジーの形態区分から、本論文で扱う二つのシリーズが、現実から離れた空想世界を扱ういわゆるハイファンタジーであるが、違う区分に属するファンタジーであるとしている。また、先行研究の多くは原作中心で、ジェンダー研究は女性キャラクターを主とした異性愛中心のフェミニストの視点で書かれていること、人種表象と階級表象の研究では二つのシリーズの人種・種族の分類、そして分析の基準があいまいであると結論づけ、ましてや映像の視覚性を含めて包括的に分析したものはない、と言う。そのため本論文のテーマを考えれば、先行研究には限界があると結論づけ、ファンタジー映画の新たな方向を見出すという本論文の意義について確認できたこと述べている。

第二章はジェンダー表象について論じている。まず二つのシリーズのキャラクターの性別の比率を提示している。『ハリー・ポッター』シリーズ全作品の統計では女性比率 35%で、『ロード・オブ・ザ・リング』では女性比率 11%である。明らかなジェンダー不平等の存在を証明した上で、主なキャラクターのジェンダー・アイデンティティをジェンダー・パフォーマンス・観点から分析し、ジェンダー転覆の可能性にも注目しながら考察している。その結果として、両作品とも家父長制に対する批判的な視点が盛り込まれていることを明らかにしている。その分析は原作から映画へアダプテーションされている過程での変化も読み取り、たとえば『ハリー・ポッター』のハーマイオニーやジニーにおける敵への抵抗やゲームでの活躍、『ロード・オブ・ザ・リング』の原作から映画におけるアルウェンやエオウィンの変更による活躍が男性領域で行われていることについて考察している。しかし、両作品とも、それらの女性キャラクターが典型的な主婦になったり男装して活躍したりすることから、従来のジェンダー規範や異性愛中心主義をさらに固定化させるものだと結論づける。また、『ロード・オブ・ザ・リング』のフロドとサムについては先行研究では同性愛的関係とされているが、サムのジェンダー・アイデンティティをパフォーマンス・観点から分析することによって、同性愛に限定することは難しく、本論文ではこの二人の関係をホモソーシャルな関係と結論づけている。

第三章は人種表象について論じている。二つのシリーズに登場する多様な人種、種族の区分を明確に分析した結果、二つのシリーズでは、人種的な背景についての言及を避け多元主義を標榜し特定の人種の優位性を主張することはない、と述べている。その上で、それぞれのシリーズの原作と映画(映像)が持つ表現の差を分析し、人種表象の問題点を明らかにしている。『ハリー・ポッター』では人種・種族の区分が非常に複雑で、人間(マグル、魔法を習得したマグルも存在する)、魔法使い(純血、マ

グルとの混血もいる)、ヒトたる存在(ハウスエルフやゴブリンなど)に分けられ、それぞれに偏見を持っている。しかし大きな問題は、さまざまな人種が周辺化されていることであり、原作では、名前のみでしか人種を想像できず非白人を見えない存在にしているが、映画では、たとえば衣装を通して非白人が白人とは異なる人種であるということを明確にしている場合がある。人種のアイデンティティを強調することが、逆に差別につながる危険性には無頓着である、と論者は述べている。『ロード・オブ・ザ・リング』には、エルフ、人間、ドワーフ、ホビットなど善側の人種がさまざまないるが、問題となるのは、物語世界の「中つ国」の空間性、つまり地理的構成である。「中つ国」の地理的構成を俯瞰すると西部地域は善人が住んでいる国であり、東部地域は悪人の領土になり、これを実際の世界に当てはめると西洋と東洋の区分になってしまう。『指輪物語』の原作者であるトルキンが、オークという悪の人種をアジア系のように描写したことで、彼が東洋人に対する人種の偏見をある程度持っていたと推測できるが、原作では、西部のローハン国の人々は、白い肌、金髪で背が高く、東部に住むハラドリム国は、黒い目や黒く長い編髪をした浅黒い民族が住むと描写されている。また映画においてのオークにはマオリ族出身の俳優が起用され、一作目は黒い肌のオークしかいなかったのが、二作目、三作目では緑の肌や赤い肌のオークが出現し、観客を攪乱しているが、そこには差別的意識が見え隠れしていると断じている。

第四章は階級表象について論じている。『ハリー・ポッター』における階級構造は、基本的に血統、魔力、経済力の順となっており、血統が同じである場合には魔力が基準になり、血統と魔力が同じ場合には経済的条件が基準となることを突き止め、階層の最上位は純血の魔法使いであり、最下層はヒトたる存在のハウスエルフやゴブリンということになる。純血の魔法使いのマルフォイ家を取り上げ、ピエール・ブルデューの理論を応用し、上流層は上流階級のハビトゥスを、下層民は下層階級のハビトゥスを内面化することで階級意識が再生産されていると述べている。また、階級差別全般においては原作にあるハーマイオニーのハウスエルフ解放戦線活動は映画で削除されており、原作では階級問題が存在するのに対し、映画では階級は存在するが差別に基づく行為は縮小されていることを明らかにしている。『ロード・オブ・ザ・リング』では、善側の人種内部に階級差別は見えない。悪側のオーク社会には階級差別が存在し、サルマンが絶対的な権力を持ち、ウルク＝ハイ、オークに階級差別がある。しかし、善側の種族には差別はないが、映画ではその階級が映像的なイメージとして表現されていると論者は述べている。それは階級と社会的地位は、衣服と身体的特性を通して観客に提示されている。ホビットは農民の服を着、ドワーフも同じように労働に適した服を着て髭を伸ばしている者が多く、彼らは背も低い。アラゴルンやエルフたちは戦士の服を着て、ブロンドの髪、きれいな肌を持ち、上品なイメージを醸し出している。実際には差別的な行動はないのかかわらず、このイメージによってその階級差を観客に提示していると述べている。いずれにせよ『ハリー・ポッター』の人種・階級表象と、『ロード・オブ・ザ・リング』の既存の政治体制の擁護と王政の復古に帰結される指輪戦争は、英国の階級体制が安定して理想的なモデルとして認識されるようになっており、英国帝国主義イデオロギーが色濃く反映されていると分析している。

結論は、①映画のアダプテーションによるジェンダー、人種、階級表象の変容、②二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の共通点、③二つの映画におけるジェンダー、人種、階級表象の相違点、の3項目に分けそれぞれ明確に述べている。

この二つのシリーズとも、ファンタジーという架空の夢物語であるのに、人間あるいは人間社会の歴史的な歪みや、現代そのものの問題が取り込まれている。社会規範として成立しているジェンダー規範が、偏見や不平等をもたらし、それがまた、誰かを縛り抑圧の根源になるとしたら、そのジェンダー規範は、解体されるべきものである。また、人種と階級に対する人々の態度や行動が、誰かに不利益をもたらすとすれば、その態度や行動も変わらなければならない、と結論づけている。

この論文はジェンダー・人種・階級という3つの視点に焦点を当てながら複合的に分析していることに成功しており、原作と映画化作品を取り上げることで、映画と文学の双方向性に分析が提示され、映像の視覚性や文学からの映像化という課題と問題点も垣間見ることができる。またファンタジーという想像力によって構築された世界であっても、人種、ジェンダー、階級による差別が無自覚に現実から写し取られる現象を、数多くの具体的なシーンの採集と検証から浮かび上がらせたことで、新たな知見を示した意義ある論文となっている。

よって本論文は、博士(芸術学)の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和3年2月1日